

この作品は、DeNA／バンダイナムコゲームス『アイ
ドルマスター シンデレラガールズ』を題材にして書かれ
た二次創作作品です。

作中に示される表現・解釈は、著者独自のものであり、
著作権社様とは一切、関係ありません。

3 うつし世の国のアリス

「うつし世は夢 夜の夢こそまこと」

江戸川 乱歩

I

浅野風香には、夢がある。

その夢を知るのは、自分と他にはただ一人だけだ。

いつか叶えば良いと願い、そのために歩き続けることを厭わないで来た。

だが、果たして自分は目的地に辿り着けるのか。

そもそも歩んでいる道が、目的地に続いているのか。

それを疑わない日もまた、無い。

ここは、風香が所属するアイドル事務所の一角にある、小さなサブ会議室だ。少人数の打ち合わせで使われる部屋だが、今日は使用予定がない。

夕方、学校を終えてから、事務所に顔を出す。スケジュール帳が真っ黒になるような売れっ子とは程遠い彼女は、本来ならば毎日事務所を訪れるような理由は無いのだが、この場所は居心地がよくて、好きだった。

特にこの平日の夕刻という一時は、暖かく柔らかくも、どこか寂しい夕焼けの茜が、まさに西の窓から入ってくる。

黄昏時、またの名を誰そ彼時と呼ばれる時間。

目の前にいる人の顔が、よく見えない、そこにいるのが誰なのか分からない。

果たして、あなたは誰か、と思う時。

そして、また同時に、逢魔が時とも呼ばれる時間。

目の前にいる人は、誰なのか。

果たして、それは人ではない、魔なのかも知れない、と恐れる時。

夕焼け自体も心地よいが、この時刻をそう名づけた昔の人達のセンスが凄いと思う。

何を思っ、そう名づけたのだろう。一生かかっても、自分にはそんな閃きは、訪れないのではないかと思うと、それは魔と出会うよりも、恐ろしいことのような気がする。

さいわい、今はこの部屋には誰もいない。

ビルのフロアを一階借りて設けられている事務所は、人の出入りが激しい。一番のメインの部屋は、今日も慌ただしいことだろう。

竜宮小町や天海春香、如月千早といった旬のアイドルを抱える765プロの子会社として、デビュー間もないアイドルを育てるために作られた当事務所だったが、今では本家を

も凌ぐ、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いを見せている。

神崎蘭子や、渋谷凜、興水幸子、十時愛梨、その他のア

イドルの誰かをテレビで見ない日は、無いだろう。

だが、風香は彼女たちとは比べ物にならない。

ようやく、テレビの端っこに映るのが、精一杯だ。

だから、こうして自分の時間を費やしている。

会議室の中央に置かれた机に向かい、ノートパソコンを広げ、キーに手を置いたまま、風香は「はあ」と声を出して、ため息を吐く。

肺の奥の奥から、重たい空気を追い出すように、ゆっくりと、大きく。

ため息は、風香の癖だ。あまり印象が良くないことは分かっている。だが、これは儀式みたいなものだ。

そうすることで、幾分なりとも、心の平穏を保てるのだから、止めることはできない。

せめて、他人の前ではやらないように、心がけている。

いま、悩んでいるのは、ネットで連載している小説の今後の展開だ。

二週間に一度は更新するように心がけているのだが、次の予定日まで一週間を切っても、まだ続きが書けないでい

る。前回、主人公が敵の軍勢に囲まれてピンチに陥ったところで『続く』としたのだが、彼がどのようにして助かるのか、実は思いつけないでいる。

彼の従兄弟が颯爽と登場して、敵をなぎ倒す、そんな展開にしようか。

いやいや、これまで伏線も設けていないのに、それはあまりにも都合主義というものだろう。

締め切りばかりが、刻々と迫り、それでも書けない自分に苛立ちを感じている。

風香が書いているのは、中世ヨーロッパファンタジーの騎士とお姫様の物語。冒険あり、恋愛あり、陰謀ありの大スベクタクルだ。

そもそも、ある程度の見通しを立てて連載を始めたはずなのに、気づけば思惑は道を逸れ、話は迷走し、キャラはぶれ、当初思い描いたものからは程遠いものになってしまった。

それでも騙し騙し書き続けてきたのは、せつかくこれだけ書いたものを無駄にしたいくないという気持ちと、読んでくれている人への申し訳無さからだ。

お話を書き始めたのは小学校の三年生くらいの頃から。パソコンを買ってもらって、ネットで発表するようになって

たのは、二年ほど前からだ。

ぼつりぼつりと書いては、専用サイトに投稿していたものは、それなりに評価を得て、熱心な読者も何人かついていた。

だが、それもそろそろ限界。いっそ、物語は打ち切りしようかと思う始末。

それでも、この思い入れの深いお話は、簡単に無かったことにはしたくない。

「はあ」と、風香がもう一度大きく、大きく、ため息をつくと同時に、

「風香、随分とたそがれているな」

ノックもなく入室してくるなり、声をかけてきたのは、彼女のプロデューサーだ。

正確な年齢は知らないが、たぶん二十代後半。業界の中では、若手の部類に入る。

温和な顔立ちとひよろつとした体つきは頼りなく見えるが、これでも中々の辣腕らつわんを振るう。そうでなければ、一度に十数人のアイドルを担当しながら、彼女たちをこごとくヒットさせるという芸当はできないだろう。

彼の手腕をもってしても、いまだにブレイクしていない

数少ないアイドル。それが、風香だ。

こんな自分をなぜ、彼はいつまでも熱心に面倒を見てくれるのか、その理由は怖くて訊けないでいる。

「す、すみません」

慌てて、椅子を立つ。

「別に、そのまま良いよ。僕に構わないで、続けてくれれば」

そうは言われても、執筆は他の人がいる場所ではなかなかできることではない。

「プロデューサーさんはひと休みですか？」

「うん、なかなか局の要求が厳しくてね。みんなに負担はかけたくないから、なんとか交渉してるんだけど膠着こうちやく状態だね。ちよつとブレイクタイムなんだ」

「……大変ですね」

そういった駆け引きのことはよく分らないが、彼が自分たちのために戦っていることは伝わってくる。

「風香は、いつもの？」

「は、はい。すみません」

「いやあ、続きが楽しみだから、期待してるよ。あのピンチをファルがどうやって切り抜けるのか。風香の中では、すごいアイディアがあるんだよね？」

ファルというのは、風香が書いているお話の主人公の騎士の名前だ。

「え、ええ、はい、頑張ります。すみません」

風香の言葉に、プロデューサーは「そうか」と、頷き、

「もし、困っていたら相談に乗るからな」と続けた。

「い、いえ、大丈夫です」

「そうだな。素人の僕じゃ参考にはならないかな」

「そ、そんなことはありません」

このプロデューサーの読解力が優れていることは承知している。既に風香の悩みくらいは、察しているはずだ。

だが、敢えて何も言わないのだろう。

ガヤガヤとしていたはずの部屋の外の廊下が、ふと静かになる。

二人とも口を開かず、夕刻の会議室に、沈黙が訪れる。

「こういうのを、天使が通るって言うんだな」

「そうですね」

「この事務所だと、天使は誰だろう？ さしずめ、幸子かな。もつとも『自称』がつくけどな」

その言葉にはどう答えて良いか分からず、風香は曖昧あいまいに頷くしかない。

興水幸子は、自分より二つ下だが、事務所では先輩に当たる。

可愛らしい見た目と伸びのある抜群の歌唱力、それとは裏腹に残念な性格で、バラエティではいじられ役がびつたりで、ドヤ顔アイドル、略してドヤドルとして人気が出ている。今ではテレビに出ずっぱりの人気者だ。

「局のお偉いさんが、部屋に戻るところかな。僕もそろそろ戻らないといけないな」

やれやれ、とばかりに首を振りながら、プロデューサーがぼやく。

「ところで、風香。実は、君に一つ仕事が決まりそうなんだ」

部屋を退出する間際、ふと振り返ると、彼が口にする。

「本当ですか？ あ、ありがとうございます」

「そうは言っても、歌の仕事じゃないから申し訳ないんだけどな」

「いえ、なんでも頑張ります」

「また詳しく決まったら、話をするよ。じゃあ、いっちょ戦ってきますか」

そう言っつて、今度は本当に部屋を出て行く。
風香は、また一人になる。

なぜ、引つ込み思案で自信の持てない自分が、曲がりなりにアイドルをやっているのか。

我ながら不思議に思うことがある。

それは、間違いなく一世一代の決断だった。

風香のアイドルとしての生活は、とても奇妙なスカウトから始まった。

ネットで小説を発表するようになって、一年余りが経つ頃のこと。とにかく、書くことが楽しくて仕方なかった。

連載は順調に進み、感想のメールもいくつかももらえるようになっていた。

それらの多くは、同年代の女子からで、内容も好意的なものが多い。

だが、ときには困ったものもある。

面白くなかった、とか、つまらなかった、というのはまだ良い。それは自分の実力が足りないのだから。

いわゆる誹謗中傷ひぼうちゆうじやうは、話には聞くが風香の所には届いたことはない。

何が困るか、たとえば、作品の感想とはまったく無関係のものだ。

プロフィールを仔細しさいに公開しているわけではないが、年の女子だということは匂わせている。

そうすると、男性からの変なメールが届くことがある。

ナンパ目的なのか、単にいたずらなのか、時には言葉にするのはばかられるような、恥はづかずかしいものもある。

もちろん、返信などはせずに放置する。大抵は一度きりで、それ以降は届かない。恐らくは絨毯爆撃じゆうたんばくげきのように送っているのだろう。

だが、純粋な感想メールなのか、そうでないのか。開いて、読んでみるまで分からない。だから、どうしても、読みたくないものまで読んでしまうことはある。

そのメールも、最初はいたずらだと思った。

感想は確かに書かれている。しっかりと読み込まれ、風香が意図するところを汲くみつつ、さらに自身では意識していなかったようなところまで踏み込んだ、作者としてはとても嬉しい内容だった。

だが、感想の続きには、首を傾かげざるを得なかった。

「突然で驚かれると思いますが、僕はアイドルのスカウトをしています。常に、才気ある若い女性を探しています。あなたの小説は、荒削りですが輝くものがあります。その

感性を他の分野でも活かしてみませんか。もし興味があれば、返信いただけませんか？」

そんな内容だ。

これがもし、出版社からの依頼だったら、一も二もなく飛びついたかも知れない。

だが、そうではない。

まったく畑違いの、よりによって、アイドル？ 自分に素質があるかも知れない？

訳が分からない。

だが、いたずらと断するには、ちゃんと事務所と名前、連絡先も書かれている。

ネットで調べると、その事務所は有名な765プロの子会社で、所属するアイドルの中には、自分でも知っているような子が何人もいる。

いたずらではなく、手の込んだ詐欺さぎなのではないか。うかつに話に乗ると、お金を騙し取られたり、もっと酷いことをされたりするのではないか。たとえば、その、いやらしいビデオとか。

仮に本当だとしても、どれだけ相手が本気なのか分からない。そもそも、アイドルならば見た目も重要だろう。もちろん

ん、写真など公開しているはずもない。そんないい加減なことでもいいのだろうか。

最初は無視することに決めた。

だが、一週間後に小説の続きを更新すると、再び丁寧なメールが送られてきた。今回の内容も、感想はとてもきめ細やかなものだ。そして、最後にはまたアイドルのスカウトについて書かれていた。

「不審に思うのは当然かも知れませんが、決して怪しいものではありません。もちろん、あなたが実は中年男性だというならば、諦めます。でも、あなたの書く小説から、僕は若い女性ならではの瑞々みずみずしさを感じるのです」

そう褒められれば、悪い気はしない。

だが、やはり無視した。

そして、最初のメールから一ヶ月、五回目の感想とスカウトの案内が届いた時に、ついに風香は根負けした。

とは言え、ようやく出した返事は断りの返事だ。勇気を出して、自身の写メも添付しておいた。

テレビで見るアイドル達は、キラキラと輝いている。可愛くて、綺麗で、自信に満ち溢れて見える。

だが、自分はそうではない。到底アイドルができるとは思えない。

そう、返事を出した。

これで、もうメールが来ることもないだろう。

真摯しんしな読者が一人減ることは悲しい。素敵な感想をくれる相手に興味もある。

だが、それもこれつきりだ。

この一ヶ月は、いつときの夢、幻だったのだ。

だが、それでもメールは来た。

写真の風香は、とても魅力的だ。僕は自分の目に絶対の自信を持っている。きつと、君はアイドルになれる。

そんな内容だ。

歯の浮くような恥ずかしいことが、書かれている。

いったい、この人はなぜこんなに熱心に自分を勧誘するのか。風香には、理解できない。

アイドル業よりも、差出人本人に興味が湧く。

最後に書かれていた「一度直接会って話したい」という文を読み、改めて書かれていた連絡先に、気の迷いのように電話をし、しどろもどろに会話をしていると、なんだか知らない間に、会う約束をしていた。

当日の直前まで悩んだが、約束した以上は、それを破るのは申し訳ないと思い、決めた日時に出向く。

男性と二人きりで会うのは、初めての経験だ。

もし、万が一変なことをされたら、思い切って大声を出そうとドキドキしながら、約束よりも一時間近く早く、目的の喫茶店に着く。

それから三十分くらいして喫茶店に現れたのは、誠実そうな若い青年だった。

「はじめまして、浅野さん。ずいぶんと早いね。待たせてしまつて、申し訳ない」

名刺を受け取るのも、生まれて初めての経験だ。

「すみません、お断りするつもりで来ました。あれだけ熱心にメールを頂いたので、直接会ってお話するのが、礼儀だと思つたんです」

「そういう真面目な所も、ますます気に入ったよ」

彼はにこりと笑うと、

「まあ、そんなに話を急がないで、なにか頼もう」
横を見ると、ウエイトレスが待つていた。

雑談をしながら、ひとしきりアイドルについての説明を受ける。

「す、すみません。そんなにお話されても、最初に言ったようにお断りするつもりなんです」

「浅野さんは『うつし世は夢、夜の夢こそまこと』っていう言葉、知ってる？」

それは、唐突な質問だった。

「は、はい。江戸川乱歩えどがわらんぽが好んで色紙に書いた言葉ですよね」

この現実には夢で、夜に見る夢こそが真実である。日本の探偵小説の始祖であり、また幻想や猟奇的な話を好んだ乱歩らしい、含蓄に富んだフレーズだ。

風香も、その言葉が好きだった。

そこには、希望がある。昼間、楽しくない学校生活を送る自分は夢。夜、宿題を終えてから、パソコンに向かい物語を書いている自分こそが真実。

「僕も好きなんだ。これはね、口説き文句で使おうと思って、ずっと感想メールには書かないで取っておいたんだ。君の小説は、乱歩の影響を受けてるんじゃないかな？」

「え、ええ」

そんな指摘を受けたのは、初めてだった。

確かに、エログロと呼ばれる乱歩の耽美たんびな世界には惹かれるものがある。

「だったら僕と一緒に、夢を見てみないかい？ アイドルもある意味、夜の夢だよ。小説を書きながらでも、アイドルはできる。浅野さん自身が、夜の夢になれるんだ」

「私が、夜の夢になれる？」

オウム返しに聞き返す。

「でも、私なんか……」

まだ、戸惑いの気持ちがある。だが、心が揺れていることも感じる。

この人ならば、自分のことを理解してくれるこの眼の前の青年ならば、もしかしたら、そんな不可能と思えることも可能にしてくれるかも知れない。

「浅野さん、変身してみないかい？ 君じゃない君になるんだ。それこそ、怪人二十面相みたいにね」

「私に……できるでしょうか？」

「実は、僕も若い頃に小説を書いていたことがあるんだ」
まだ充分若いだろう、と思うが口にはしない。

「だから、分かるんだ。小説を書くという行為は、自分と向き合うということだ。自分の心の奥の奥まで、深く潜り込んで、そこから何かを見つけないことだ。見つかるものは、必ずしも素敵なものとは限らない、いや、自分の中の嫌なものを見つけないことの方が、ずっと多い。……僕

は、それに耐えられなかった。でも、浅野さんはそれを続けています。僕は、君を尊敬するよ」

「……違います。私には、向き合うほどの確固たる自分がない。ただそれだけのことです」

彼の言う理屈は分からないでもない。だが、自分はそんな大層なものではない。

「それなら、君は何者にもなれる。そういうことさ」
彼はさらに、と言つてのける。

「もし、なれるなら、私は作家になりたいんです」
これまで、心に秘めていた夢。誰かに話したことはなかった。それでも言わなければ、諦めてくれないだろう。

「だったら、その夢も僕が応援するよ。叶えるのは、浅野さんだ。そして、僕は君を全力で支える」

……ああ言えば、こう言う。

だが、その熱意が心地いい。目の前の青年は、本気だ。自分の夢を笑わず、真剣に自分を見ようとしてくれていた。浅野風香自身よりも、もっと情熱的に。

ふう、と長い息を吐いてから、風香は続ける。

「分かりました、あなたのことは信用します。それに、アイドルの経験が書くことに役立つかも知れませんし……」

半分は、自分を納得させるための言い訳にすぎない。

本心では、このまま、この魅力的な彼との繋がりが断たれてしまうのが、怖かったのだ。

「きつと、役に立つさ。よし、君は今日から夢の世界の住人だ」

それから、あれよあれよという間に、契約まで行ってしまった。両親はとても驚いたが、それもプロデューサーの説得に、最後は折れたようだ。

一度やると言つたからには、簡単に止めるとは言う訳にはいかない。

だが、やはり現実には甘くない。夢の世界と云うには、あまりに過酷だった。

胸の大きい（それも、コンプレックスの一つだ）風香には、はじめグラビアの仕事が入った。人前、それも男性の前で水着になるのは、とてつもなく恥ずかしかった。

途中でどうしてもできない、と泣き出してしまった。撮影は中止になり、プロデューサーには多大な迷惑をかけた。

もうクビだろうと思つたが、彼は「ごめんよ、もっと風香に合った仕事を見つけてるべきだった」と謝るだけだった。

それから、一年あまり。

風香の芽は出ていない。事務所所属の他のアイドルのおまけで、ドラマのエキストラに加わることがせいぜいだ。

休日はレッスンに励み、歌唱力やダンスは、多少はできるようになった。

でも、まだ持ち歌もなく、アイドルとしては、まったく無名の存在だ。

風香が不甲斐なく、惨めに思うのは、単に自分の置かれた現況ではない。

自分がプロデューサーの当初の期待に応えられていないということだ。

風香がアイドルとして成功しなければ、自分を信じてくれた彼の腫が曇っていたということになってしまう。

彼のために。

その気持ちを恋と呼ぶのならば、きっとそうなのだろう。

◆
プロデューサーと会議室で話をしてから数日後。

正式に、仕事の内容が決まったそうだ。

「今回の仕事は、テーマパークの取材なんだ」

と、彼は郊外にある有名な遊園地の名前を上げた。

「風香は、あまり行かないか？」

「は、はい……。その、一緒に行く人もいないので」

「そうか。いつかは、そんな人ができるといいな」

風香の言葉をどのように捉えたのか、プロデューサーはそう言っただけで笑う。

「出てもらうのは情報バラエティ番組で、見どころを紹介するっていう内容だ。風香みたいな初心者の方が、新鮮な目で伝えられるかも知れないな」

なぜ自分が選ばれたのか、その経緯は分からないが、せつかく入った仕事だ。

「は、はい。頑張ります」

気合を入れて、返事をする。

「それで、先方の希望なんだけど、鏡の迷路に入って欲しいってことなんだ」

「鏡……ですか」

「なんだ、風香は鏡を知らないのか？」

冗談めかして、尋ねる。

「い、いえ、もちろん知ってます」

「そうだよな。風香は、女の子だもんな。毎日、何時間も見る方か」

「そ、そんなことは……」

むしろ、最低限必要な時間しか、見たくないくらいだ。

「それで一度、下見に行こうと思ってるんだが、今度の日曜日の都合はどうだ？」

「下見？ プロデューサーさんと一緒にですか？」

思わず、上ずった声が出る。

「嫌か？」

「す、すみません。そんなことないですっ」

「良かった、安心したよ」

二人で遊園地……。これは、もしかしてデートというやつではないだろうか。

しかし、喜びもつかの間。

「その日は、珍しく幸子のスケジュールが空いてるんだ。

あいつも別の番組で、やっぱりそこに行くことになってるから、三人で一緒に下見に行こう」

「輿水さんですか？ わ、分かりました」

意気消沈したことを悟られないように、はつきりした声

で頷く。

「それは凹面鏡によって囲まれた小宇宙なのです。われわれのこの世界ではありません。もつと別の、おそろく狂人の国に違いないのです」

II

『鏡地獄』 江戸川乱歩

「おはようございます、輿水さん」

日曜日の朝、事務所から一番近い駅前で待ち合わせる。

幸子は既にベンチに座って、待っていた。

リボンのついた大きな白い帽子を目深に被り、揃いの白いワンピースを着た幸子は、まさしくカワイイと呼ばれるに相応しい、清楚な見た目をしている。

「浅野さん、おはようございます」

「今日は、よろしくお願ひします。……あの、プロデューサーさんは？」

「まだ、来ていません。まったく、こんなカワイイボクを一人きりで待たせるなんて、どうかしてますね！」

彼女とはこれまで、ほとんど話をしたことはない。

テレビで見るともずっと可愛いなあ、テレビで聴くのと同じ声だなあ、と当たり前のこと感心してしまう。

小柄で、特に顔がちっちゃくて、ほっそりしていて、色

が白くて、触れただけで壊れてしまいそうだ。

まるで、自分と同じ人間だとは思えない。

「悪い、悪い。出掛けに電話が入って、ちよつと遅れた」

駆け足でやってきたのは、プロデューサーだった。

仕事の時はいつもスーツだから、ラフな格好をした彼を見るのは、とても新鮮だ。

「プロデューサーさん、に、似合って……」

と言いかけた風香の言葉は、

「まったくです、遅いですよ！　ところで、ボクは無性にパフェが食べたい気分です」と幸子に遮られる。

「分かった、分かった。あとで自腹で好きなだけ食べてくれ。じゃあ、行くか」

電車に揺られて、目的地に向かう。

「どうして、電車なんですか？　カワイイボクの素性が周りの人にバレたら、大変ですよ。ボクの魅力は隠そうとしても、隠しきれぬものではありませんからね！」

椅子には、風香、幸子、プロデューサーの順で座り、幸子が隣りの彼に小声で話しかけている。

「そうは言っても、車だと停める所を探すだけでも一苦労だろう……。幸子はサングラスでもかけるか？」

「それじゃあ、ボクが不審者じゃないですか。ねえ、浅野さん？」

「え、ええ」

「もつとも、ボクは不審者でもカワイイですけどね！」
よく意味が分からない。

自分より年下だが、事務所への入所は先で、人気や認知度では雲泥うんていの差のある幸子のことは、よく知らない。

今日、こうしてプロデューサーがいるとは言え、一緒に出かけることには不安もある。

何を話したら良いのか、どんな話題が好きなのか、さっぱり想像がつかないからだ。

「幸い、幸子の正体が周りにバレることもなく（それはそれで、『どうして、カワイイボクに誰も気づかないんですか！』と憤慨ふんがいしていたが）、遊園地に到着する。たぶん、帽子で陰を作っていたおかげだろう。」

「風香がバレるはずもないことは、たとえバレたところで騒がれるはずもないことは、自分が一番よく知っている。」

休日のテーマパークは、大勢の人で溢れかえっていた。

園内には、華やかな音楽が流れ、いやでも気分を盛り上

げる。

入り口に向かつて、一緒の方向に歩いている人たちは、家族連れ、友人連れ、恋人同士だろうか。老若男女が賑々にぎにぎしい。

「せつかくの休みに、悪いな」

チケットを買ったプロデューサーが戻ってくる。

「何をいまさら言ってるんですか。今日はプロデューサーさんのおごりなんですよね」

「いや、事務所の経費だ。ちひろさんに頼んで、なんとか認めてもらったんだ」

「カッコ悪いですね！ せつかく、カワイイ女の子を二人も連れてるんですから、もつとカッコいいところを見せたらどうですか」

「そう言ってくれるなよ」

「あ、あの、二人つて、私もカワイイですか？」

幸子の言葉に、思わず反応する。

「カワイイんですか？ もちろん、ボクほどじゃないですけど」

「い、いえ、ありがとうございます」

「風香は、鏡の迷路。幸子は、ウォーターライダーが本

番の取材対象なんだが、二人でそれぞれ行つて来い、とい
うわけにもいかないよな。先に風香の方でいいか？」

いつまでも入り口付近でぼうっとしているわけにもい
かない。

プロデューサーが行き先を提案する。

「は、はい」

「か、鏡ですか？」

幸子の目的地がウォータースライダーだとは知らなかつ
た。同様に、幸子も風香がどこに行くのかは、前もって聞
いていなかったのだろう。驚いたような声を出す。

「どうした、幸子？」

「浅野さんは、鏡の迷路に行くんですか？」

「ああ、この迷路は、『アリス・イン・ミラーラビンス』
と言う名前で、国内でも有数の大ききらしいぞ。なあ、風香」

「は、はいっ」

事前にネットで調べておいたが、改めて説明されると、
なぜか緊張してしまう。

「そ、そうなんですか。それは楽しみですね！ それで、
ボクはウォータースライダーなんですわね」

「ああ、そっちは後にしようと思う」

「分かりました。ボクの方を後にとっておく訳ですわね。プ

ロデューサーさんは、好きなものを最後に食べるタイプで
すね！ 仕方ありませんね。さあ、浅野さん、さつさと行っ
て、さつさと終わらせましょう。か、鏡の迷路なんて、ボ
クにかかれば簡単過ぎますからね！ それでは取材になり
ませんもんね！ 浅野さん、頼みました！」

そういう幸子は、やけに早口だ。

「……幸子はびしょ濡れになるかも知れないからな。後回
しの方がいいだろう」

隣では、プロデューサーが小さな声で不穏なことを呟い
ている。

先行きに、若干の不安を覚えなくもない。